

[ 調査研究報告 4 ]

# 大阪城・上町台地における 文化イベントの展開と史跡・文化財

北川 央  
(大阪城天守閣)

## 1 はじめに

本報告では、現在大阪市が主催もしくは共催者として名を列ねて展開している大阪城・上町台地を舞台にした歴史・文化イベントについて、開催に至る経緯とその内容をかいつまんで紹介させていただきたい。

他の三報告がそれぞれ上海・釜山・クアラルンプールについて、第三者の立場から客観的に論じられたのと違い、本報告の場合は、報告者の私自身がイベントを企画・立案している中心メンバーの一人であるため、いわば私自らまな板の上にいることとなるわけであるが、本題に入る前に、なぜ私がこうしたイベントの企画・立案に携わるようになったのか、どういう目的でこのようなイベントを開催しているのかということを理解していただくために、私が学芸員を志すようになった経過について、少しばかりお話をさせていただきたいと思う。

私は大学の学部生・大学院生時代には日本古代史を専攻していたのであるが、その際大きな影響を受けた方に、当時岡山大学文学部教授であった吉田晶氏がおられる。同氏は1984年に校倉書房から『現代と古代史学』という本を刊行されたが、そこには戦前および戦時中の厳しい思想・言論統制から解き放たれ、自由に研究できるようになった喜び、そして歴史学の研究成果を何の妨げもなく一般市民と共有できる喜びが満ち溢れて

いた。

私は吉田氏のそうした叙述に深い感銘を覚えたのであるが、その一方で私が学部生・大学院生時代を過ごした**1980**年代中頃の日本史学界の実情はどうであったかという、そうした喜びをもの見事に忘れ去って、一般向けに語ること、書くことについて、それを蔑む風潮が蔓延しており、そのようなことに携わる研究者はそれだけで批判の対象にされかねない雰囲気であった。

ところで、**1980**年代半ばといえば、バブル経済へと向かうたいへんな好景気で、大都市周辺を中心に各所で開発が次々に行なわれ、歴史的に重要な遺跡や街並みなどが至る所で破壊の危機に瀕していた。歴史学界では、考古学界と力を合わせて住民を巻き込んだ保存運動を展開して、これに対抗していたのであるが、大阪市内の難波宮跡のように、すばらしい成果を勝ち取ったケースももちろんあったが、記録保存だけに留まり、遺跡そのものは全く姿を消してしまう敗北例も少なくなかった。

私自身も、わずかながらそうした保存運動にかかわったことがあるが、研究成果を市民と共有することを拒否する学界が、こういう保存運動のときにだけ、都合よく市民を巻き込もうとする姿勢に大きな矛盾と疑問を感じるとともに、研究者がどれだけ遺跡の重要性を訴えても、それだけでは保存という形での市民合意を達成できないという無力感も大いに味わった。そうした経験から、市民・国民共有の貴重な財産である文化財を後世まで末永く守り伝えていくためには、まずその支持基盤を形成することが最重要であると痛感するに至った。つまり、歴史や文化財のおもしろさをより多くの一般市民に伝え、歴史・文化財に興味・関心を持つ人を一人でも増やすことが、結局は文化財保存の早道であり、近道であると認識するに至ったのである。

とはいうものの、既に述べたように、当時の学界にはそうした雰囲気は皆無で、『歴史読本』（新人物往来社）・『歴史と旅』（秋田書店）といった一般向け雑誌も、執筆者の多くは作家の方々が占めていて、研究者は、一般市民に歴史や文化財に興味・関心を持ってもらうための入口作りに、ほとんど関与できていないように思われた。さらに**1984**年には『歴史と人物』（中央公論社）、翌年には『歴史公論』（雄山閣）が相次いで廃刊となったことが、私には、歴史学と市民との間をとりもつツールが次々と失なわれていくように感ぜられ、私は危機感・焦燥感をより一層募らせたのである。

こうした状況把握は、今から振り返ってみると、たぶんに誤りも含んでいて、独りよ

がりの部分もずいぶんあったのであるが、とにかく非常ベルを聞いてしまったものは仕方なく、誰もやらないのなら自分がやるしかない、強い使命感を勝手に持つようになり、自ら歴史学界と市民との間の架け橋になるべく、学芸員を志すようになった。とはいうものの、文献史学の古代史では学芸員になるのはかなり困難で、私自身自らの古代史研究に行き詰まりを感じていたこともあり、思い切って近世史に転向して学芸員を目指すこととした。

そして就職した先が、今も勤務している大阪城天守閣である。大阪城天守閣の場合、他の歴史博物館のように歴史・文化財についてあらかじめ関心を持った人が入館者の大半を占める施設ではないことから、きわめて幅広い層の入館者に対し、学術的に高度な内容をいかにわかりやすく伝えるかということを一貫して追求してきた(註1)。そのすばらしき実践者で、よき手本でもあった渡辺武前館長のもと、**10**年以上にわたり学芸員として仕事をさせていただいたことは、それまで以上により強く、一般市民に語りかけ、書くことの重要性を私に認識させてくれた。

大河ドラマをはじめとするテレビの時代劇を見たり、司馬遼太郎氏などの歴史小説・時代小説を読んだことが、歴史に興味を持つきっかけになったという人ばかりでなく、大阪城に来たり、どこかの博物館の展示を見て、また研究者が一般向けに書いた本や文章を読んで、歴史に興味を持ち始めたと言ってくれる人が少しでも増えてくれることを願って、私は日々大阪城で学芸業務にいそしんでいる。

日本史の場合、いったん興味・関心を持った人に対する受け皿は、学界・博物館界がさまざまな形で用意している。他の学問分野と比べても、その充実度はかなり高い。けれど、まず最初に歴史・文化財の方へ顔を向けてもらうよう導くことが、実は一番難しい。私を含む大阪城天守閣の学芸員は、日常の展示はもちろんのこと、一般向け雑誌や新聞への執筆、講演活動、またテレビの歴史番組への制作協力など、一般市民に対し歴史・文化財への興味・関心を喚起する仕事に相当な時間を費やし、多くの力を注いでいる。私にとっては、大阪城・上町台地における歴史・文化イベントの企画・立案もそうした仕事の一環なのである。

## 2 大阪城におけるイベント展開

さて、大阪城においては、1983年の大阪築城400年まつり「大阪城博覧会」や天守閣復興50周年（1981年）・60周年（1991年）記念事業、“平成の大改修”後のリニューアル・オープン（1997年）など、機会があるごとに大規模イベントを開催してきたが、現在につながるという意味での起点は1998年4月に実施された大阪城天守閣の社団法人大阪観光協会への管理・運営委託である。この管理・運営委託をめぐるのは、大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・日本史研究会をはじめとする歴史学会や一般市民・マスコミから拙速を戒める声が多数寄せられ（註2）、私自身も『歴史科学』157号に「大阪城天守閣—復興から現在にいたるまで—」という拙文を公表して、大阪城天守閣の管理・運営委託がいかにか妥当性を欠くか、詳しく述べたが、結局1998年3月の定例市会で可決され、翌4月1日から我々学芸部門を除いて、大阪城天守閣は大阪観光協会に管理・運営委託されることとなった。そして、その春から大阪観光協会が、天守閣前の本丸広場で、天守閣への観光客誘致のためのイベントを開始する。ところが、経費だけは相当な金額が出ていくものの、それを目当ての客が来るどころか、大阪城に来ている人さえほとんど見向きもしないほど、内容に乏しいイベントが春・夏と続いたため、イベントの継続開催について、その是非が検討されることとなった。

大阪観光協会への管理・運営委託後、大阪市直営の学芸部門と観光協会に委託された事務・管理部門の意志疎通と、施設として運営の一体化をはかるため、両者管理職による「企画運営会議」が毎月一回定例的に開催され、この会議が大阪城天守閣の最高意志決定機関と位置付けられることとなった。ここでの議論の結果、

- ①大阪城天守閣の展示も含めて大阪城全体を一般市民の方々に歴史を体感していただく場としてコーディネートしていく。
- ②そのために本丸でのイベントを継続開催していくが、春と秋にはそれぞれ大阪城天守閣でテーマ展・特別展を開催していて、それなりに世間の話題にもなり集客効果があるし、冬は寒すぎて季節的に屋外イベントには適さないもので、当面夏に絞って開催する。
- ③イベントを開催したその日だけを取り出して、入館者の増減を云々したところで、多少の増加があったとしても経費的に見れば赤字は間違いないので、長い目で大阪

城ファンを育て、歴史・文化財に関心を持つ人を増やしていくための事業と位置付け、将来的な集客効果を目指す。

等々の結論がまとまり、イベントの継続開催が決まった。そして、企画・立案に関しては、それまで大阪観光協会の観光事業部がやっていたのを大阪城天守閣に移し(註3)、私を中心になって進めていく体制となった。

こうした経緯を経て開催したのが、翌**1999**年8月**13**日～**18**日の「夏の大阪城まつり『伝統芸能フェスティバル』」で、国指定重要無形民俗文化財の伊勢大神楽(伊勢大神楽講社)や三河万歳(安城の三河万歳保存会)、茨城県指定無形民俗文化財の水戸大神楽(水戸大神楽家元柳貴家正楽社中)、そして上方講談(旭堂小南陵・同南鱗・同南太平洋)などにご出演いただいた【図版4-1、4-2、4-3、4-4】。

会期をここに設定したのは、大阪城を築城した豊臣秀吉の命日が8月**18**日だからで、慶長9年(1604)8月に行なわれた秀吉7回忌の豊国臨時祭礼で神前において放下芸(ほうかげい)の演じられたことが知られる(註4)から、その放下芸をこんにちまで伝承する伊勢大神楽・水戸大神楽にご出演いただき、上方講談でも豊臣秀吉や大坂の陣を題材にした「太閤記」「難波戦記」を語ってもらうなど、この季節に大阪城でやるのにふさわしい内容に仕立てあげた。

当時私が、大神楽・万歳といった芸能に興味を持ち、調査などを通して各団体とお付き合いがあったこともあり、出演料という点でもそれぞれ破格のご協力をいただき、大阪観光協会の観光事業部主導で開催していたときと比べてひと桁違う、5分の1ほどの経費で、この『伝統芸能フェスティバル』を開催することができた。しかも国指定文化財クラスの一級品の芸能を集めたことで、新聞・テレビなど各報道機関も大きく扱ってくれ、各回とも**1000～2000**人の観衆が集まり、炎天下にもかかわらず、すこぶる熱心にご観覧いただいた。

大阪市や観光協会の幹部たちも視察に訪れたが、彼らも初めて目にする伝統芸能の妙技にすっかり心を奪われた様子で、中には「久しく忘れていた『感動』という言葉を出した」と言い残して帰った人さえあった。

感動したのは我々主催者側や観客だけでなく、ふだんとはかなり違った層の観客の前で自分たちの芸能を思う存分披露できた出演者たちも同様だったようで、帰郷後、地元紙に手記を寄せ、その興奮ぶりを伝えた方もあった(註5)。各団体とも未だに「あの時

の気分は最高でした。また機会があれば是非呼んでもらいたい」とおっしゃってください、「予算がないのなら、出演料なしでも構いません。もう一度大阪城の天守閣前で演じ、あの感動を味わいたい」とまで言って来られ、再出演を希望しておられる方さえある。

第1回目が大成功に終わったことで、年1回の天守閣前本丸広場におけるイベントの方向性が確定したのであるが、私自身は、大阪市や観光協会がことさら強調する大阪城への集客効果という面以外にも、こうしたイベントを通じて無形文化財の保存・修復にも寄与できないか、実験してみたいという別の思わくもあった。

当時、私は東京・国立劇場（日本芸術文化振興会）養成課の講師もしていたのであるが、いずれの伝統芸能も慢性的な後継者難に悩まされていた。私が主たる研究対象としていた伊勢大神楽とて例外ではなく、国から文化財指定を受けているとはいっても毎年若干の補助金が支給されるくらいで、国も地元自治体も、保存や後継者育成に積極的に関与してくれるわけではない。有形文化財なら部分的に壊れても修理が可能であるが、無形文化財の場合は、いったん後継者が不足して、芸態が変化し、衰退が始まると、もはや簡単に修復することなど不可能となる。

現在の文化財行政の無形文化財に対する姿勢は、極端に言えば、後継者がいなくなれば指定を解除してそれで終わり、ととれる無責任なもので、私は常々疑問を持っており、無形文化財を保存していくためには、結局、その芸能を演じる機会をできるだけ設定してやるのが、何よりも重要ではないかと考えていた。活躍の場が増えれば増えるだけ、演者の技量は向上するであろうし、併せて、その芸能のすばらしさを知る人も増え、そうした人々の中には実際伝統芸能の世界に身を投じ、演じてみようとする者さえ出てくる可能性がある。

そのためにも、伝統芸能と一般市民との間にある高い壁をできるだけ低くして距離感を縮め、本当の意味での一般市民にもっともっと伝統芸能を見てもらわなくてはならない。国内外のさまざまな人がたくさん集まる大阪城の本丸広場などはその点最適で、たまたま大阪城に来ていて、ことさら伝統芸能に興味・関心がない人でも、タダで見れるとなれば、軽い気持ちで、立ち止まって見ることができる。屋内の劇場で高い入場料をとって見てもらうよりも、はるかに多くの人々が伝統芸能と接する機会になるのである。こうした考え方は、先に述べた遺跡保存へ向けての支持基盤形成に対するそれと全く軌を一にする。私は伊勢大神楽について、学術雑誌や専門書はもちろんのこと、一般向け

の雑誌や新聞などでもたびたびその魅力について書き、テレビなどのマス・メディアにおいても紹介に努めてきたが、そうした活動も功を奏したのか、**10**年くらい前には後継者難から存続さえ危ぶまれていたこの伝統芸能に、若者たちが次々と入門を果たしてくれ、今では次世代に無事受けつがれることが確実となった。

後継者育成といったところで、とにかくその伝統芸能の存在そのものを知ってもらわないことには、何も始まらない。伊勢大神楽に関する実践例からして、無形文化財の保存・修復という意味でも、イベントは大きな役割を果たし得ると、私は確信している。

### 3 四季のイベント月間創出事業

さて、大阪城本丸広場でのイベント展開とは別に、**2000**年**11**月に林信夫氏（**21**世紀ディレクターズユニオン代表）を総合プロデューサー、橋爪紳也氏（大阪市立大学助教授）を塾長、高田公理氏（武庫川女子大学教授）をコーディネーターとする実践的集客事業ワークショップによって、『国際集客都市大阪の実現へ向けて 大阪の魅力の再生——RE - CREATIVE CITY “OSAKA” 提言——大阪の四季の祭の創造と再生「大阪四大祭の創造」』がまとめられ、当時の磯村隆文市長に手渡された。

また**2001**年**4**月には大阪市の組織改正によって、新たに「ゆとりとみどり振興局」が誕生し、同局内に「文化集客部」が新設され、我々大阪城天守閣の学芸員もここに属することとなった。

そして、**2002**年**2**月に『文化集客アクションプラン——来て、見て、楽しいまちづくりをめざして——』が策定され、ここに「四季のイベント月間の創出」という項が盛り込まれて、

四季を通じたビジター誘致と周遊性・滞在性を高めるため、既存のイベント等を一定期間に集中させるとともに、面的・時間的広がりを一層持たせた大阪の新しい「四季のイベント月間」を創出し、広報宣伝活動の一層の強化と旅行商品化を図る。

春：花と緑をテーマにしたイベント「はならんまん」を中心に、まち全体に花と緑があふれるような催しを展開

夏：「天神祭」を中心としたイベントを展開

秋：御堂筋パレードを中心とした展開

冬：クリスマスツリーやイルミネーションといった「光」をテーマにしたイベントを展開

という考え方が、具体的に示された。

大阪市関係者の中には、この『文化集客アクションプラン』の中の「四季のイベント月間の創出」と、先の『提言——大阪の四季の祭の創造と再生「大阪四大祭の創造」』との間には何ら因果関係はないという者がいるが、『提言』では、「夏の祭」を「天神祭を中心に」、「秋の祭」を「御堂筋パレードを中心に」と記す。また「春の祭」については、「大川から安治川、南港に至る川筋、沿岸、護岸沿いの景観を主舞台に川びらき祭として『花と緑』のイベントを再編して構成していく。現在毎年行なわれている『はならんまん』を大川沿いを主舞台としてビジター・観光客向けの要素を盛り込んで再構成する」云々と述べ、「冬の祭」についても、「春と同じく大川から安治川、南港に至る川筋、沿岸、護岸沿いの景観を主舞台として 12 月初旬からの『ライトアップ』と 12 月 31 日の『カウントダウンイベント』を構成・演出していく。川筋のライトアップを光のイベントとして演出することで神戸の道路上の光のイベント『ルミナリエ』、京都の風景型光のイベント『大文字焼き』、奈良のエリア型光のイベント『万灯会』との明確な差別化を持たせた関西の新しい光のイベントとして定着を目指す」云々と述べているので、『提言』の「大阪四大祭の創造」を承けて『文化集客アクションプラン』の「四季のイベント月間の創出」がまとめられたことはまず間違いない。

#### 4 大阪城・上町台地を舞台にした文化イベントの実際

2001 年 11 月 7 日、大阪城天守閣は復興 70 周年を迎えた。これに先立つ 11 月 3 日には、難波宮史跡公園近傍に新しく大阪歴史博物館がオープンした。この二つの記念すべき日が重なった 2001 年秋に「四季のイベント月間創出事業」の秋ブランドとして『大阪歴史三景』が立ち上がった【図版 4 - 5】。

『提言』や『文化集客アクションプラン』では、秋イベントの舞台として「御堂筋」が想定されていたが、そちらはそちらで御堂筋パレードを中心に翌 2002 年秋から『賑わ



いアベニュー御堂筋』が立ち上がり、以後秋については二つのブランドを並行して開催することとなった。

『大阪歴史三景』とは、ゆとりとみどり振興局文化集客部の企画調査課長であった堤道明氏（現、大阪市経営企画室長）の発案によるネーミングで（註6）、「三景」とは大阪城・難波宮・大阪歴史博物館を指す。私個人としては、内部の展示を見せる大阪歴史博物館を一つに数える「三景」に違和感は拭えなかったが、考えようによっては年ごとに「三景」の中身を変えることも可能で、今ではすっかりこの名称が気に入っている。

さて**2001**年の『大阪歴史三景』は、大阪城天守閣のテーマ展『大阪城の歴史』、地下に埋もれた豊臣時代大坂城の石垣遺構を発見以来**30**年ぶりに公開する『『謎の石垣』の一般公開』などを中心とする大阪城天守閣復興**70**周年事業と、大阪歴史博物館のオープン、難波宮史跡公園で開催される「難波宮フェスティバル」の3つを核に構成し、これまで「夏の大阪城まつり」として開催してきた『伝統芸能フェスティバル』の要素も、この秋ブランド『大阪歴史三景』に移した。

結果は大成功に終わり、『大阪歴史三景』が「四季のイベント月間創出事業」の一つとして定着する。翌年の**2002**年からはNHK大阪放送局の協力を得て、同局との共催でNHK大阪ホールを会場に歴史シンポジウム「この地で歴史が動いた」が始まり、四天王寺から大阪城まで、毎年さまざまなテーマを設定して歩く「大阪歴史ウォーク」もラジオ大阪との共催という形でこの年から始まった。シンポジウムは事前応募制で開催したが、告知を始めるや否や一週間で応募数が定員をはるかに上まわるほどの人気を博し、抽選の結果、当選者約**1000**名がこれに参加した。ウォークの方は、京都・奈良ならともかく大阪市内のど真ん中で「歴史ウォーク」をやったところで、人が集まるのかと成功を危ぶむ声がゆとりとみどり振興局内部にも強くあったが、当日受け付けで約**3000**名が参加し、大盛況となった。両方のイベントとも大成功で、これにより、天守閣での展覧会、本丸広場での伝統芸能、大阪城・上町台地をテーマにした歴史シンポジウム、大阪城・上町台地を舞台にした歴史ウォークという『大阪歴史三景』の基本形が完成した【**図版4-6、4-7、4-8**】。

秋ブランド『大阪歴史三景』がこのように順調にスタートを切った一方で、春ブランド『大阪花爛漫』は低迷を続け、結局**2003**年春から新ブランド『大阪春めぐり』へと移行した。翌**2004**年には「桜」「川遊び」「伝統」を三つの柱に、造幣局の「桜の通り抜け」

や大阪城西の丸庭園・毛馬桜之宮公園の「観桜ナイター」、水上バスその他による「大川・桜めぐり」「夜桜船」、大阪城天守閣のテーマ展や四天王寺宝物館での寺宝公開、四天王寺の聖霊会、上町台地の寺社を会場にした落語会などで構成し、本来の主演であった「はならんまん」は関連イベントという位置付けとなって、舞台も大阪城・上町台地へと大きくシフトする【図版4-9】。そして、この『大阪春めぐり』についても、私が企画・立案にかかわることになり、読売新聞大阪本社との提携も成立して、イベントの共催だけでなく、紙面展開の上でも協力を得る体制が整いつつある。

夏ブランドは天神祭を核に、大阪市内各所の夏祭りをまとめて紹介する『大阪夏彩(なつのいろどり)』が立ち上がったが、天神祭そのものは従来どおり、あるいはそれ以上に盛況なものの、コア(シンボル)イベントの欠如から、ブランドそのもののアピール力が弱く、『大阪夏彩』という夏のイベント月間の印象が極めて希薄であった。そのため、祭りをテーマにしたシンボル・イベントを、大阪城を舞台に企画してもらえないかとの要請が、またぞろ私のもとに舞い込むこととなった。本来の学芸業務に加えて、春・秋のイベント企画などで手一杯の私ではあったが、繰り返しの要請に渋々ながら承諾し、江戸時代“三都”と並び称された江戸・京都・大坂のそれぞれの気風を色濃く反映する祭り囃子の競演と、併せて天守閣内の展示として『大阪城の屏風飾り』を企画した。展示の方は、江戸時代の大坂では夏祭りの日に、各家それぞれが通りに面した店の間に家宝の屏風を展示する「屏風飾り」の風習があったことに因んだもので、大阪城天守閣収蔵の都市図・名所図・物語図・合戦図・祭礼図など、各種屏風を展示した。競演の方は、結局、京都がいずれの団体ともスケジュール調整がつかなかったため、国指定重要無形民俗文化財の江戸里神楽松本源之助社中と大阪天満宮地車講の2団体をお招きして、**2003年8月16・17**の両日、「江戸・大坂の祭りばやし」を開催した。

**2001**年の『大阪歴史三景』以降、その中へ移行した「夏の大阪城まつり『伝統芸能フェスティバル』」が3年ぶりに復活を果たした格好となったわけであるが、その同じ年、毎日放送から翌年夏に大阪城を舞台に共催の形でイベントを開催できないかとの話が突然飛び込んできた。

私としては、①大阪城公園は特別史跡に指定されており、文化財保護の立場からいろいろと制約があること、②内容的に大阪城という場にふさわしい歴史・文化性の色濃いイベントがたくさん盛り込まれることが絶対条件で、東京・お台場を舞台にフジ・テレ

ビが開催している「冒険王」の二番煎じ的なイベントをやるために大阪城を会場として使うことには到底同意できないことなどを、本局であるゆとりとみどり振興局へ回答した。

毎日放送からは、もとよりそうしたことは十分承知しているので、イベントの内容は毎日放送と大阪市の両方で協議しながら練り上げていきたいとの返答があり、両者のスタンスを確認する意味で、急遽同年8月**30**日、翌年へ向けてのプレ・イベントとして、天守閣前本丸広場に特設ステージを組み、『**MBS** 城灯りサマートーク』の開催が決まった。第1部は大阪城に関するさまざまな疑問をテーマにしたトークショー「知ろう！城～！大阪城」、第2部はラジオ番組「どーだ！ますだおかだ」の公開録音という構成で、無事成功裡に終わり、当初予定になかった第1部についても、9月**29**日にラジオで録音放送された。

両者のスタンスを了解しあえたことで翌年夏のイベント開催が決まり、その後約**1**年かけてさまざまな議論を重ねて順次内容を決定していき、**2004**年7月**31**日から8月8日までの9日間、毎日放送主催・大阪市共催という形で『オーサカキング』を実施した【図版4 - 10】。会期中に2度も台風に襲われながら、9日間で**42**万人を超える人々を動員し、一般世間的にも大きな話題となったことは記憶に新しい。

毎日放送の番組関連イベントやブースを中心とする太陽の広場から、天守閣のある本丸広場へと向かうにしたがい歴史・文化性が次第に色濃くなるよう大阪城全体をデザインし、本丸では天守閣の展示以外に、『『秘密の井戸？』特別公開』というネーミングで、地下に眠る豊臣時代の石垣遺構を公開し、本丸の金蔵や二の丸の多聞櫓・千貫櫓・六番櫓も期間中特別公開した。山里丸に設けられた特設ステージでは、7月**31**日と8月1・7・8日の4日間、表千家・裏千家・武者小路千家などによる茶会を催した他、8月5・6日の両日には、豊臣大坂城の盛衰をテーマに、毎日放送のアナウンサーの方々による朗読イベント「おはなし夢ひろば特別講演 大坂城物語」が上演された(註7)。また本丸と太陽の広場に設けた二つの特設ステージでは、生國魂神社のまくら太鼓と獅子舞、玉造稻荷神社のだんじり囃子など、大阪城とゆかりの深い伝統芸能・郷土芸能が連日上演された。もちろんこの部分は、前年に開催した『大阪夏彩』のコア・イベントや「夏の大阪城まつり」以来の『伝統芸能フェスティバル』の要素を持ち込んだものである。他にも大阪城全域を舞台に、「ばけもの屋敷跡」「秀頼・淀殿ら自刃の地」など、不思議

スポットを巡る「大阪城ミステリーウォーク」というスタンプラリーを開催し、台風で初日は中止というアクシデントに見舞われたものの、残り8日間で4万人弱の方が参加され、各ポイントには、設置された解説板を読み(註8)、スタンプを押すため連日長蛇の列ができた【図版4-11】。

ふだんならあまり大阪城に足を向けようとしなない人たちが多数大阪城にやって来て、城内の史跡・伝承地を訪ね、天守閣内の展示や地下の石垣遺構、櫓の内部などを見学してくれたこと、また会期中および前後の番組内でそうした大阪城の魅力についてたびたび触れてくれたことは、多くの一般市民を大阪城に振り向かせたという意味で、きわめて大きな意義があった。

こうして「四季のイベント月間創出事業」の内、秋の『賑わいアベニュー御堂筋』と、中之島を舞台とする冬の『OSAKA 光のルネッサンス』以外は、いずれも大阪城・上町台地が舞台となり、私が企画・立案に深くかかわることになったのである。

## 5 おわりに

2004年10月11日、大阪再発見プログラム実行委員会の主催で、「知っていますか? 『大阪から始まった熊野参詣道』」というイベントが開催された。

高野山や吉野・大峯などとともに熊野三山がユネスコの世界遺産に登録されたことを記念する行事として、かつて熊野九十九王子の第一王子があった渡辺津(窪津)から、四天王寺を経て住吉大社まで、熊野街道を歩こうというもので、当日は関西経済連合会・関西経済同友会他で構成される「歴史ロマン“熊野御幸行列”実行委員会」による「熊野御幸行列」(註9)と併せて実施され、4000人を超える方々が参加した。

この2004年10月11日の「知っていますか? 『大阪から始まった熊野参詣道』」は、京阪電車の丸太町駅に集合して後白河・鳥羽・白河の各天皇陵や聖護院門跡・伏見稻荷大社などを経て城南宮に至る9月20日と、南海電車の住吉大社駅から境王子跡・方違神社・大鳥大社などを経て南海電車の浜寺公園駅に至る12月11日の3回で構成される『紀伊山地の霊場と参詣道』世界遺産登録記念 熊野街道ウォーク」の第2回として実施されたが、熊野御幸行列の再現と併催であったことを割り引くとしても、第1回の京都が

700名足らずであったのに比べてはるかに多数の参加者があり、あらためて大阪・上町台地の歴史に対する関心の高まりが、関係者に強く印象付けられた。

ところで、この「知っていますか？『大阪から始まった熊野参詣道』」の実施主体となった「大阪再発見プログラム実行委員会」は、京阪電鉄・南海電鉄両社から大阪市に対し、「大阪にある名所、旧跡の再発見につながる企画を検討し、実施することにより、大阪の賑わい振興につなげることを目的」（「大阪再発見プログラム実行委員会運営規約」）に設立したいと申し入れがあり、ゆとりとみどり振興局文化集客部と（財）大阪観光コンベンション協会が参加する形でスタートしたもので、文化集客部からの要請で私も「顧問」の肩書きで同委員会に名を列ねることとなった。

それまで「四季のイベント月間創出事業」実行委員会では、『大阪歴史三景』のNHK大阪放送局・ラジオ大阪、『大阪春めぐり』の読売新聞大阪本社、『オーサカキング』の毎日放送とのタイアップをはじめとして、マスコミ各社との全方位外交で、イベントの周知徹底に努めてきたが、交通機関についてはJR西日本に依頼して、同社の広報誌にイベント開催の記事を掲載してもらい、告知用ポスターの駅貼り・社内吊り、車内放送など、多大な協力を得てきた。それに加えて、京阪電鉄・南海電鉄からの申し入れにより「大阪再発見プログラム実行委員会」を設立できたことは、大阪・上町台地の歴史的・文化的魅力をさらに広く情報発信できる体制が整ったと評価できる。

たしかに、『大阪花爛漫』や当初の『大阪夏彩』が低迷したにもかかわらず、舞台を大阪城・上町台地に移すことで成功に導いたことは、大阪市を含む関係者に歴史・文化ゾーンとして同地域の重要性を再認識させる上でも、非常に大きな効果があった。

そして、歴史ウォークに参加された方々が、寺町の寺院群をはじめとして、四天王寺と大阪城の間に、あれだけたくさんの史跡・文化財が存在することに驚きの声を挙げられたように、各種イベントの開催は、一般市民に大阪城や上町台地に残る歴史遺産について関心を持っていただく絶好の機会にもなった。

実際、市民の中から、上町台地にある豊富な地域資源を活用した町づくりを考えていこうと2003年5月に「上町台地からまちを考える会」が発足したり、NPO法人「もうひとつの旅クラブ」が大阪城・上町台地を舞台に、歴史・文化的資源を活用した知的な旅を新たに提案するなど、さまざまな形で歴史遺産の価値を正しく知り、その上で活用しようという動きが根づき、活性化しつつある。

これこそ本報告の冒頭で述べたように、私が目指した方向性であり、間違いなくその成果が実を結びつつあると思っているが、決して課題や不安材料がないわけではない。

毎年秋に実施する「大阪歴史ウォーク」の際には、ポイントとなる寺社や史跡に、大阪城天守閣・大阪歴史博物館の学芸員や大阪観光ボランティアガイド協会・てんのうじ観光ボランティアガイド協議会の方々に立っていただき、口頭での説明をお願いしている。なぜこのようなことをしているのかというと、四天王寺～大阪城間の寺社・史跡について、解説板が決定的に不足しているからである。

この点については、我々だけでなく、観光業界からも度々厳しく指摘されているのであるが、残念ながらなかなか改善されず、こんにちに至っている。原因は、大阪市役所内の関係各部局の押し付けあい、すなわち俗にいう縦割行政の弊害である。“国際集客都市”実現を標榜し続けた大阪市ではあるが、実態となると、このように基盤整備さえ全くといっていいほどできておらず、たいへんお寒い限りなのである。

また「四季のイベント」を実際担当しているのは担当課長以下4人の事務職員で、それに私を加えた計5人が主としてかかわっているに過ぎず、イベントの規模や数からして絶対的に人数が不足しており、まさに自転車操業状態にある。これではとても良質なイベントを提供し続けるのは無理である。また、事務職員は2～3年単位で異動してしまい、上町台地の歴史や文化財についての知識がある程度蓄積されてきたと思う頃には新しい人と入れ替わるので、上町台地でのイベントを継続開催する上で、たいへん大きな障害となっている。事実、毎年のように協力をお願いしている寺社などからは強い不満の声も出ており、地域社会との信頼関係の構築という点でも、こうした人事システムには大きな問題がある。イベントだけでなく、文化集客という施策全体を遂行していく上でも、それにふさわしい要員配置と、新たな人事異動のサイクル確立が切に求められているといえよう。

その他、イベントが大阪城・上町台地に集中し、いずれも私が企画・立案に深くかかわっているため、内容的なテイストが似通ってしまい、季節感以外は春・夏・秋で差別化できなくなりつつあるのも、たいへん大きな問題である。しかもイベントの数が多過ぎ、それぞれにたくさんのメニューを用意しなければならず、加えて近年は「四季のイベント」以外でも同種の相談が相次いでいるため、私自身のアイデアももはや枯渇寸前で、早晚マンネリ化することは想像に難くない。今後、イベントの企画・立案について

は、地域との信頼関係を保ちながら、他の担当者にゆるやかな交替をはかっていく必要があるが、大阪城天守閣にはもともと学芸員が館長以下4名しか配置されておらず、絶対的に要員が不足しているから、教育委員会所管の大阪歴史博物館との間で、それぞれの専門性を活かしつつ、部局を越えた協力関係をさらに強化することが必要不可欠となってくる。

以上要するに、『文化集客アクションプラン』として、大阪市役所内部で非常に大きな位置付けがある割には、それを遂行する体制がおそろしく脆弱であることが、大きな問題点であるわけであるが、こうした点については、先の縦割り行政に起因する課題も含めて、今後の大阪市役所の取り組みによって改善される可能性はわずかながらも残されている。

実際、私が最も懸念しているのは、そういうことではなく、特に大阪城について、その抜群の集客力が再認識された結果、特別史跡に指定されて、国内で最も重要な文化財の一つと位置付けられているにもかかわらず、そうした高い文化財的価値を軽視して、集客ゾーンという視点からのみの“整備”をしようとする動きが見え隠れし始めたことである。

繰り返し述べてきたように、私は、歴史や文化財に興味・関心を持つ人を増やし、文化財を守る市民合意を形成するために、その手段の一つとしてイベントを活用し、マス・メディアや交通機関などにも協力を仰いで、広く周知・徹底をはかってきたつもりである。けれど、その結果が文化財の破壊につながるのであれば、私がこれまでにやって来たことが水泡に帰すどころか、全くの逆の方向に向かって一所懸命に努力を重ねてきたことになる。

そもそも私が携わったそれぞれのイベントにしても、大阪城がきわめて高い文化財的価値を有し、その歴史の現場で、質的にもそれにふさわしいものをわかりやすく提供してきたからこそ、集客という面でも成功をおさめてきた。文化財としての価値やイベントの内容に自信があればこそ、胸を張ってマス・メディアにも協力をお願いできたのであって、前提が違えば、このような成功はなかったはずである。文化財的な価値を深く知ろうともせず、ただ「集客」という観点だけで大阪城公園を“整備”したところで、一過性の集客はあったとしても、継続的なそれは絶対に見込めない。それどころか、これまで足を運んでくれた人たちさえも遠ざけてしまう結果になりかねない。長期的な集

客をほんとうに目指すのならば、大阪城を、その高い文化財的価値にふさわしい歴史公園・史跡公園として整備するしか、方法はないはずである（註10）。

もし今後、大阪城について、悪い意味での「整備」計画が現実に浮上したとき、市民の方々がそれについて異議を唱え、文化財としての大阪城の保全を求める声が大きく沸き上がってこそ、私がこれまでやってきた成果がほんとうの意味で実を結んだことになる。そのときに真価が問われるのである。

## 註

- (1) 拙稿「岡本良一『岡本良一史論集』上・下」（黒田日出男他編『日本史文献事典』）
- (2) 『ヒストリア』159号・169号、『日本史研究』428号、『関西じつわ』平成10年3月9日号他。
- (3) 管理・運営委託後、大阪城天守閣の事務・管理部門は大阪観光協会の天守閣事業部と位置付けられた。観光事業部は、この天守閣事業部とは別で、大阪観光協会の本部にあり、国内外でのプロモーションをはじめとする大阪の観光振興事業などを担当した。
- (4) 京都・豊国神社所蔵「豊国祭礼図屏風」ならびに徳川美術館所蔵「豊国祭礼図屏風」（いずれも重要文化財）。
- (5) 柳貴家正楽「真夏の夜の夢、のまた夢—平成大神楽版『大阪城夏の陣』—」上・下（『新いばらき』1999年9月3日、4日付朝刊）。
- (6) 『大阪歴史三景』をはじめとする大阪城・上町台地を舞台にした文化イベントについては、この堤氏と企画調査課主査の森正照氏（現、文化集客部集客観光課課長代理）、そして私の3人が実質的な推進役を果たした。
- (7) 原作は毎日放送アナウンサーの柏木宏之氏で、私が監修した。
- (8) 各ポイントの解説板には、文字解説に加えて、毎日放送の番組に出演しているタレントさんたちによる音声ガイドも併置し、たいへん好評を博した。
- (9) 前財務大臣の塩川正十郎氏が後鳥羽上皇役をつとめ、総勢100名の参加者が時代装束に身を包んで、第二王子の坂口王子跡と伝えられる南大江公園まで練り歩いた。
- (10) 明治安田生命保険相互会社“関西を考える”会発行『始まりは関西 進取の精神と風土を探る』の第5章「提言、関西のポテンシャルをどう活かす」で、大阪城に限らず、一般論として発言しているので、参照されたい。





4-1 「夏の大阪城まつり『伝統芸能フェスティバル』」のチラシ（1999年8月）



4-2 「夏の大阪城まつり『伝統芸能フェスティバル』」で演じられた伊勢大神楽（1999年8月16日）

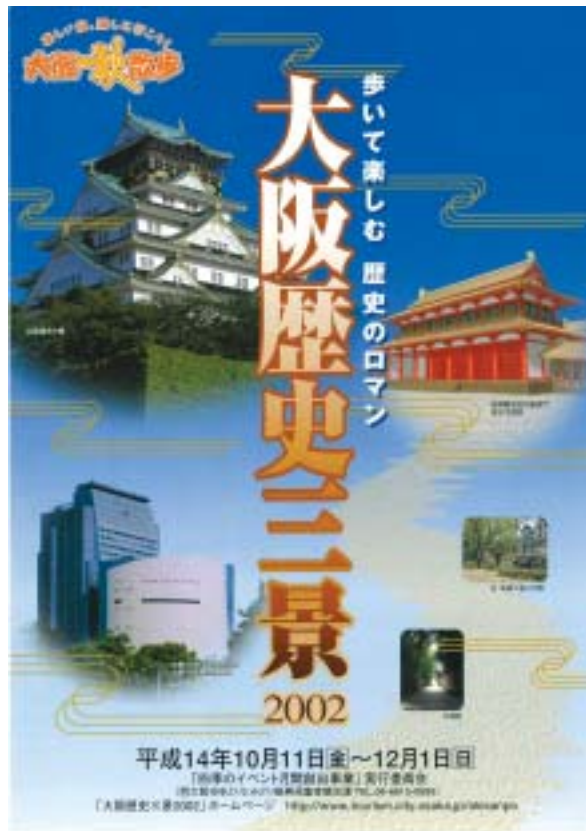
- 4-3 「夏の大阪城まつり『伝統芸能フェスティバル』」  
で演じられた水戸大神楽  
(1999年8月14日)



- 4-4 「夏の大阪城まつり『伝統芸能フェスティバル』」  
で演じられた三河万歳  
(1999年8月14日)



- 4-5 『大阪歴史三景』のパフレット表紙  
(2001年9月)



4-6 『大阪歴史三景』のパンフレット表紙（2002年9月）

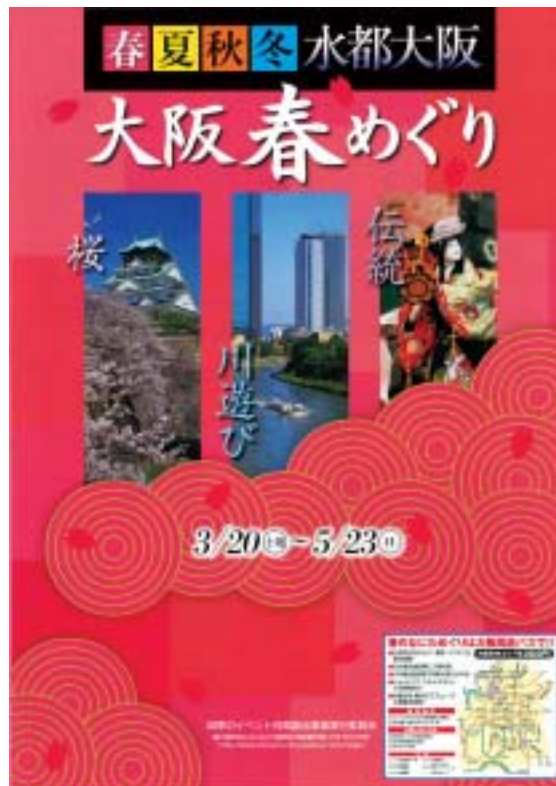


4-7 NHK大阪ホールでの歴史シンポジウム「この地で歴史が動いた」。  
出演は、帝塚山学院大学教授中尾芳治氏、大阪城天守閣名誉館長の渡辺武氏とNHKアナウンサーの松平定知氏（2002年10月28日）





4-8 四天王寺中門前の境内を埋め尽くした「大阪歴史ウォーク」の参加者（2002年11月10日）



4-9 『大阪春めぐり』のパンフレット表紙（2004年3月）



4-10 『オーサカキング』のパンフレット表紙（2004年7月）



4-11 「ミステリーウォーク」のポイントにできた長い行列（2004年8月7日）

